

建築家：Josep Maria Jujol y Gibert（1879-1949）に関する建築調査研究（12）

—「モンフェリー教会堂遺構」実測（1989-91）調査にみる所蔵図面一覧からの
「コロニア・グエル地下聖堂」との共通性の考察：スペイン・カタロニアの一建築潮流—

木 下 泰 男

星槎道都大学研究紀要

美術学部

第2号

2021年

建築家：Josep Maria Jujol y Gibert (1879-1949) に関する建築調査研究 (12)

—「モンフェリー教会堂遺構」実測（1989-91）調査にみる所蔵図面一覧からの
「コロニア・グエル地下聖堂」との共通性の考察：スペイン・カタロニアの一建築潮流—

木下泰男

要約

ローマ時代の遺構が残る地中海沿いの歴史的なタラゴナの街から内陸のタラゴナ平原に位置するモンフェリーの小さな集落にジュジョールの未完の教会堂遺構がある。ジュジョールの「生命の建築」に至った未完の「モンフェリー教会堂」の実測調査（1989～1991年）に関わる図面の整理を行なった。この図面整理の意義は、当時の遺構に新たな再建が州政府による建設チームの手が加えられ、オリジナルな状態が実測図面にしかジュジョールの痕跡の記録が残されていない点にあると考えている。葡萄畑の中の小さな丘陵に風化した未完のモンフェリー教会堂の遺構が鎮座し、一層部分の工事を中断したままの「素の建築（未完）」をジュジョールと同じ時間軸に立っているかのような気持ちに当時、心を踊らせた。A. ガウディからの脱却に苦闘するかのようジュジョールが導き出した他ならないその建築表現には興味惹かれて止まない。その表現手法と思考は、実測図面の整理を通して導き出される異なる規模の「モンフェリー教会堂」と「コロニア・グエル（地下聖堂）」との中央祭壇から身廊中央の距離がほぼ同等であることを手掛かりに、異なっていながらも共通性を帯びている表現について「モンフェリー教会堂」実測図面からの視点で考察を試みた。

1. はじめに

1989年当時、私は、目に焼き付けようとバスを乗り継ぎ、葡萄畑の中の小さな丘陵に風化した遺構が1層部分の工事が中断したまま鎮座した未完の姿を後日、バルセロナから往復バスで通いながら実測調査が始まった（Fig.1）。



Fig.1) 丘陵より集落と地域教会鐘塔を臨む 2000.

幸いしたのは、丁度、州政府が資金を用意し、故J. バセゴダ N. (レアル) カテドラガウディ教授らによるこの遺構の再建が進められ始めた時期だった。二〇〇〇年に再建が完了しているもののジュジョールのエスキス（1928）からは程遠い様式化されたその姿形には賛否の声が投げかけられていた（Fig.2）。



Fig.2) 再建されたゴシック・雁行ファサード 2000.

ジュジョールの手による状態が隠れてしまうという私の危惧の念が実測調査行動を起こす空想的な唯一のタイミングに恵まれた（Fig.3）。

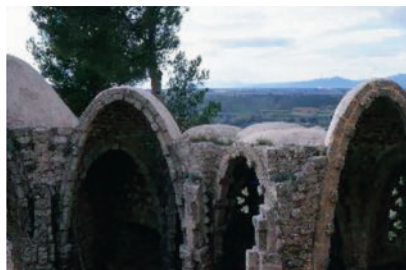


Fig.3) 1989年当時の教会堂（未完）ドーム遺構 1989.

この教会堂は、4年間地域住民との協働で、手作りの軽量コンクリート・ブロックの製作から建設が進められ資金困窮事態から、1930年に建設中断してしまう。偶然

にもこの建設が始まる1926年はA.ガウディが市電の事故で亡くなる年と重なる。

さて、私にとってジュジョールとの関わりは、最初に手掛けたこの実測調査から全てが始まる。この調査を通して見えてきたのが、別称からもわかるようにこの未完の遺構は、カタルーニャの聖山信仰の「モンセラット(奇怪な岩山)」をモチーフとしたジュジョールの外観エスキスには、幾重もの奇岩のクーポラに造形化を表現している(Fig.4)。聖山としての信仰の骨格を成しながら、



Fig.4) カタルーニャの天空聖山「Montserrat」

新約聖書に登場する「アララト」の丘の「方舟」を象徴するかのよう古代船の形の教会堂平面は舳先を丘から突き出し、あたかも船出するかのよう配置を呈している。これらの直喩表現に加え、ジュジョールの構想した教会堂に聳えるクーポラに囲まれる三つの塔の表層を化粧パックのように剥がし裏返し反転させると母なる胎内造形をも象徴する。この着眼は近接するバレンシアの「ファージャス(火祭り)」に製作される「型」と「版」の関係で型抜きされる地域生活に溶け込んだ人形の製作過程に類似していると私は考えている(Fig.5)。



Fig.5) 隣接するバレンシア州“ファージャス”祭・人形型 1990.

胎内細胞の「襞(ヒダ)」は突起としてのクーポラ群が胎内細胞と同化してくる。この教会堂全体は母なる胎内を内包するメタファー(暗喩)として見えてきたことに着目する。

2. 目的

当時作成した図面一式を整理考察し、リストを作成すること。帰国1991年当時、作成した一覧をより整理す

ることとその実測図面の中に潜む概念とモダニズムへの意識を内包する建築の思考性を図面から明らかにし、図面を手掛かりにジュジョールの後期作品を代表するこのモンフェリーの遺構の当時実測した一次資料としてジュジョール研究に寄与するための整理すること。そして、ジュジョールの精神と造形の総合を象徴すると考えられるモンフェリーの建築表現の概念についてジュジョール作品に於ける建築的な位置づけの根拠を明らかにすることを目的とする。

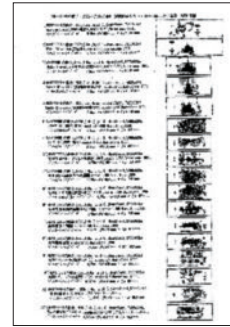


Fig.6) 帰国当時(1991)作成した図面リスト(A4版)

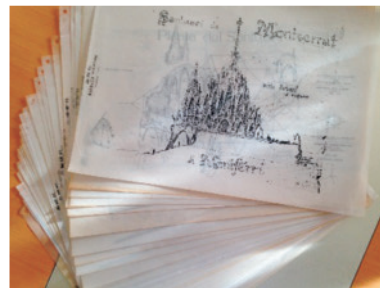


Fig.7) 縮小版(1991)作成した図面綴り(A3版, Page23)

3. 背景・整理経緯

もう既に30年近くも前になってしまったが、1989年当時、A.ガウディの一連の研究で日本建築学会賞を受賞されて、室蘭工大助教授に赴任されていた入江正之先生とバルセロナで待ち合わせし、再会して以来、帰国した1991年夏にすぐ室蘭工業大学の先生の研究室をお訪ねした。

ある程度整理した実測図の縮小版を持参し、先生に見て貰った。先生は、縮小にもルーペを持ち出し、丁寧に見て下さり、何かの形にまとめるように助言戴いたのを今も忘れない。

その数年後、早稲田大学に戻られた入江正之早稲田大学教授の監修による日本で初めて“ジュジョール”展が2000年3月に横浜の東京ガス・横浜ショールームのギャラリーで『カタルーニャ・モデルニスモ展』に実測図面が展示され、続いて2002年12月～2003年1月まで横浜・赤レンガ倉庫を会場に『生命の建築：ガウディとジュ

ジョール展が開催され、実測図面が招聘され展示され、研究する意欲が深く励まされた (Fig.8)。



Fig.8) 国内初の“ジュジョール展”横浜芸術文化振興財団・他主催, 2002.

3-1. バルセロナ近郊巡礼：

ジュジョールの初めての作品巡りは1989年冬、古本屋で一つのテキスト『La arquitectura de J. Ma. Jujol』(Fig.9) を手に取り、それを手掛かりに始まった。以前の論文で述べたガウディ建築の中のジュジョール部分に始まり、バルセロナ市内では、「カサ・プラネーリヤス」(1923年)、「トーレ・サルバドール」(1909年)、「パラシオ・デル・ヴェシード」(協働/1927年)、「万博噴水モニュメントロータリー広場」(1928年)、「タジェール・マニヤック」(1916年)や、市外近郊では、ジュジョール作品群の町：サン・ジョアン・デスピにある「トーレ・デ・ラ・クレウ」(1913年)、「カサ・ネグレ」(1915年)、「トーレ・セラ・ザウス」(1927年)、「トーレ・ジュジョール/自邸」(1932年)、などである。



Fig.9) 書籍；『J.Ma. JUJOL』, C.O.A.C.B 編集・刊行。España, 1974.

そして、南下シタラゴナ中心街は海岸に接する丘にあるローマ遺跡の遺構が残るローマ人のイベリア半島の侵入路の一つであった市街には、「テアトロ・メトロ・ポール」(1908年)、「カサ・ハイメニス」(1914年)、「カメリーン・デル・カルメン」(1919年)などを巡り、タラゴナ市街のみのジュジョール作品を訪ねまわった。

その見てきた中であってジュジョール建築らしい「未完」という可能性を秘めた未完建築作品の風化した遺構の姿に私自身興味を抱き、更に周辺地域へ足を延ばすことで、実測の意思を強く抱いたことになった。

3-2. タラゴナへの建築巡礼：

いよいよ念願との出会いになるが、巡る交通機関はバルセロナから地中海沿岸を列車で向かいタラゴナ市内のバスターミナルから各地へ向かう。バスは時間通りには来ない。歩くことを余儀なくされることも多かった。「サントウアリーリオ・デ・モンセラート/モンフェリー教会堂」(1926-30年)を見るためのバスは週三便しかなく、行ける所まで向かうことにした。集落まで左手の丘に未完の教会堂のシルエットを見ながらバスは進み、風化した教会堂遺構の丘になんとか辿り着き感激の一塩さは今も忘れない (Fig.10)。



Fig.10) 集落側から教会遺構へ臨むアプローチ 1989.

一旦、タラゴナ市内に戻り、「カサ・ボファーリュ」(1914年)と「イグレシア・デ・ヴィスタベージャ」(1918-23年)を見るために翌朝に再び内陸へ出直した。幸いにもバスは毎日出ているものの、途中のエルス・バジャレソス集落で、「カサ・アンデレウ」(1920年)と「カサ・ボファーリュ」を訪ね、〈塔屋のコーラージュ〉を遠目に〈屋外洗濯場〉を掘越しに目撃し、停留所からバスを乗り継ぎ、ヴィスタベージャ集落へは、途中の集落までしか行かず、更に3キロほど歩かざるを得なかった。丘陵の坂道を下りながらも「ヴィスタベージャ教会堂」の鐘塔を眼下の目標に歩き続け外観のみの見学だったが目撃に満足し、苦勞したこの三日間の旅は、初めて見たモンフェリー教会堂(未完)への実測の思いを更に強くした旅ともなった。

4. モンフェリー教会遺構実測の日々：

此の旅の後、調査に取り組み始めた当時は、敷地への特に立ち入り規制もなく、自由に実測が行なえる幸運に恵まれた。ただ、此の現地へは、バルセロナの新市街の

エル・コルテイングレスの Inagurada Autbus 発着場(偶然にもアパートから徒歩で近く通えた)からタラゴナ平原の内陸をバスで毎日片道四時間かけて通うことになるのである。実測調査時間は短く、バスに揺られながらジュジョールの建設当時の思いなどに空想を巡らすといった貴重で充実した時間を過ごし、その思いは、図面作成の意欲に結びつき、醸成につながったと思う。未完の「モンフェリー教会堂」遺構は、線状集落の片側の丘陵地に広がる果樹畑の松林に囲まれた小高い丘に鎮座する (Fig.11)。丘の中央部にゲートが構えられ、シェルによるうねったアリ塚のような造形化された門扉が迎い導いてくれた (Fig.12)。



Fig.11) 畑に囲まれる丘陵敷地より臨む集落 2000.



Fig.12) 畝ったアリ塚のような造形の門扉, 1989.

丘は小高な敷地の周りを果樹畑の畝がどこまででも広がっていた。

実測図面の制作は、敷地地形の把握からまず始めに行い、疎らな松林の樹木1本づつの配置から全体へと記録を開始した。続いて、組積された壁と柱の中芯位置を平面図に (S=1/50) 図って落とす作業に入り、次に、中央身廊と壁側の Y-Y 軸縦断面と袖廊中央見返り X-X 軸断面図 (S=1/50) と、外観: 東側立面 (アプローチ側) に西側立面 (反対側) を手掛け、北側立面 (後陣側) と南側立面 (ファサード側) と4方向の立面 (S=1/50) と配置図 (S=1/200) を描き上げ、マスタープランは村役場の航空写真ラッシュのコピーから縮尺1,000分の1程

度に図面化し、更に、各部詳細・ディテールエスキス図 (S=1/10~30) などへと制作に労力を費やしていった。

次に、現状の立体図面 (Oblique; ミリタリー図法) にて描き起こし、限られた時間でのインキング仕上げることに決めた。この作業は帰国間際まで完成予想立面図と共に続くこととなった。

当時、カタラン人のモンセ (Doña. Montserrat Farre) おばさんとコンパルティード (シエア) していたアパートに備え付けのクローゼットの扉を外し、裏返しにすると歴とした700×1800の楯ベニヤ張りの簡易製図版に簡易平行定規を取り付けての作図に没頭した一年半余りの歳月だった。モンフェリー教会堂 (未完) の実測調査と実測図面の意義をこう考えている。

二〇〇〇年の再建 (Fig.13) により、ジュジョールの手による建築部分が覆われてしまって遺構部分の確認が困難となり、作成した実測図面は、今後この作品について研究が進める際の遺構の資料であり、ジュジョールの未完に終わった集大成的意義を内包した大いなる夢の教会堂建築構想資料としての意義がある。何よりも、このモンフェリー教会堂 (未完) の建築が研究され尽くされていないのである。このことを所蔵する実測図面を手掛かりに考察の糸口を試みることにについて、ジュジョール建築の構想する様々な複合要素化が盛り込まれることが次第にわかってくるであろうことに加え、ジュジョール建築の変遷を探るうえでもこれら図面の整理活用は極めて重要な意義の想像に難くない。また、この建築が重要なジュジョール作品群の中の中心的位置を示唆する建築であろうと考えられることにある。

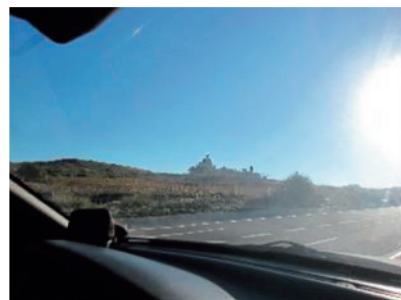


Fig.13) 再建確認に左手に現れるシルエット 2000.



Fig.14) "Iglesia de Montferri" /未完遺構当時 1989.

5. 実測図面 (野帳；1989-91 年) 整理・解説；

モンフェリー教会堂モチーフのカタロニア人にとっての聖山「Montserrat」へは、ロープウェイで中腹の修道院・礼拝堂施設まで運行している (Fig.15)。更にそこから続く山道を歩いてガウディ作の「秘跡洞穴」までは幾つもの洞穴を訪ね巡ることができる。その霊験あらたかな聖山をジュジョールはこのモンフェリーの教会堂に投影している。この教会堂遺構の実測には、1989 年当時、バルセロナ新市街から高速バスを使ってタラゴナ内陸部の小さな集落ヴィラルディダで下車し、徒歩で、モンフェリー集落まで通った 1 年半余りに集約された。1 人で計測できる規模の建築であったことに加え、自由に立ち入ることが幸いした。また、州政府の再建プロジェクトの施工開始直前の間隙の偶然の機会に恵まれたことに他ならない。所蔵実測図面一覧を以下に整理する。(* 因みに完成予想図に関する所蔵図面一覧については、次年度の紀要論文にて整理発表したいと考えている。)



Fig.15) モンセラート中腹の修道院・教会堂, 1989.

【参照】 モンセラートとは；

「モンセラート」とは、因みに、^{ノコギリ} 鋸山の意で、白い岩肌の標高 1,235 m の奇岩の山である。その中腹には、10 世紀に奉納されたロマネスク様式の「サンタ・セシリア教会堂」や 11 世紀に起源をもつ、ベネディクト派修道院の礼拝堂には、12 世紀に「サンタ・コバ洞窟」より発見された「ラ・モレネータ」(黒いマリア像)がある。1811 年フランス・ナポレオン軍の侵攻で修道院が破壊された時、敬虔な信者によって守られ、1881 年に教皇レオ 13 世によってカタルーニャの「守護聖母」とされた。以来、多くの巡礼者が訪れる聖地となった。フランコ独裁政権時代には、禁止された「カタラン語」で「ミサ」を行いつつ、カタルーニャ人の信仰と民族主義意識の砦としての役割を担ってきた。修道院附属大聖堂は、カタルーニャ・カトリックの総本山でもある。

【参照資料】 (：図版 5 枚)

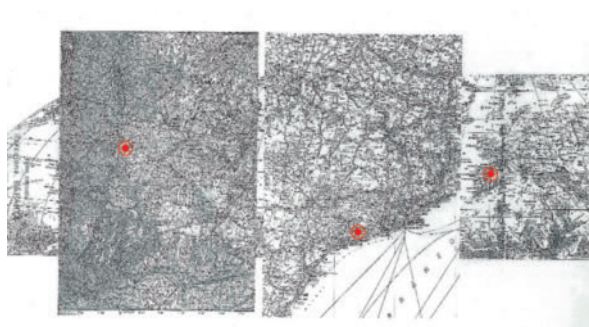


Fig.16) 地図 (S-1) ; AltCamp-Cataluña-Spain (3 地図)



Fig.17) 空撮 (S-2) ; Montferri 集落；役所所蔵 (ラッシュ部分)

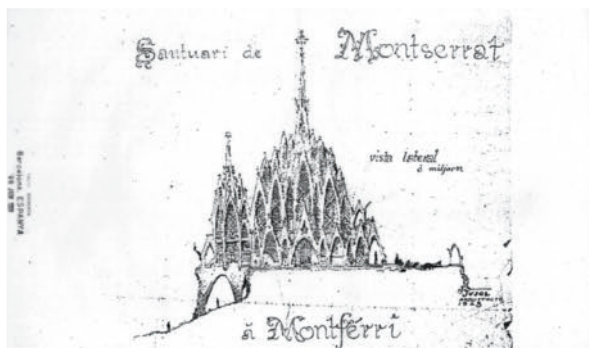


Fig.18) Montferri 立面エスキス (S-3) ; J.Ma. Jujol, 1928.

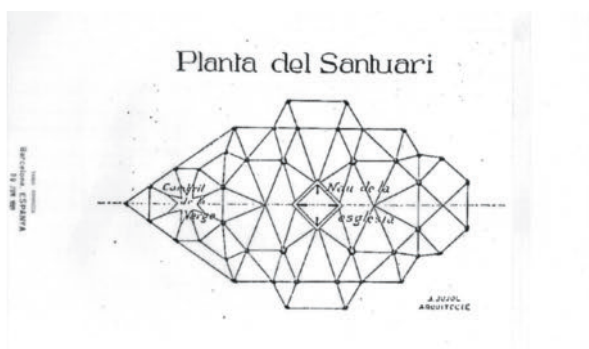


Fig.19) 柱割 (柱芯) 平面図 (S-4) ; J.Ma. Jujol, (不明)



Fig.20) Montferri 身廊中央断面図エスキス (S-5) ; J.Ma.Jujol, (不明)

5-1. 実測図面解説・一覧 (別表参照)

1) 実測 (遺構 1991) 立体図 Oblique, Military projection.; No 01/23p インキング, Wトレベ, (S=1/50) W950×L2,050 mm (原版), Barcelona, Spain. 1991.* (拡大は p158 参照)

・解説; 当時の現状を克明に記録するため, この図を完成したく, 実測図をとにかく描き続けた。中央の立体図の周りには完成案の要素を組み合わせるように描いた。この図面は, 縮刷用にレイアウトしなおしたものになるが原版は横長 W950×L2,050 mm になる (Fig.21)。

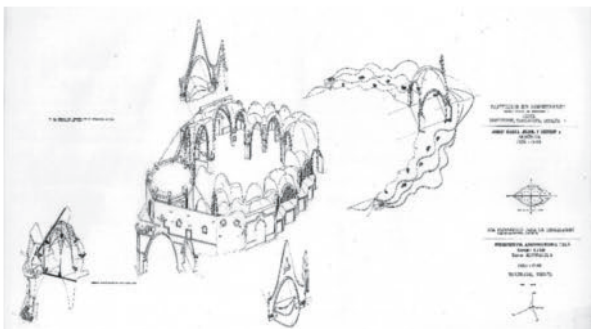


Fig.21) 実測 (遺構 1991) 現況立体; Oblique, Military projection; (縮小版), Barcelona, Spain. 1991.*

2) マスタープラン・集落広域/1989 現況; No 02/23p, 航空写真複写* アジュタミエント所蔵提供鉛筆トレース, トレベ, (S=1/1,000) W450×L850 mm, Barcelona, 1990.*註1) 執筆者所蔵

・解説; このマスタープランは, アジュタミエント (村役場) 所蔵の空撮写真から複写をとり線画の縮尺に整えた。左下にモンフェリーの線状集落があり, 右側の畑の畝の中に教会堂の隆起したかの敷地が見える (Fig.22)。



Fig.22) マスタープラン・集落広域, Montferri, 1990.

3) サイトプラン・現況配置/1989; No 03/23p 鉛筆, トレベ, (S=1/200) W450×L850 mm, Barcelona, Spain. 1990.*

・解説; 教会堂の敷地は, 中央がくびれ細長く, 両端が広がった瓢箪 (ひょうたん) 型のような敷地で, その中央がエントランスのアプローチであり, ここがこの敷地の交差点でもあり, 左に敷地丘陵の崖から教会堂が後陣部を飛ぶ出す形で配置された教会堂へ, すぐ向かいのゲートを下ると反対側の敷地下の洞穴に向かい, 右に向かうと, 祭事が行えそうな広場が広がっていて, 段丘のような2段に畑へと一体化していく (Fig.23)。

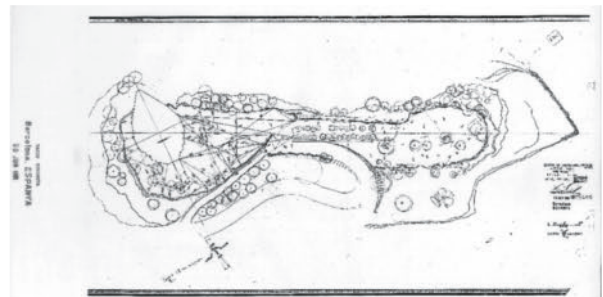


Fig.23) サイトプラン敷地配置, Montferri, 1990.

4) 実測 (遺構 1989) 1F 芯心柱割 1/2 平面図; No 04/23p 鉛筆, トレベ, (S=1/50・1/30) W450×L950 mm, Barcelona, Spain. 1989.*

・解説; 平面の柱割りを実測し, 1/2 平面に図面化した。図面を完結させ, 次の作図図面への急ぐ思いが伺え, 内陣部と8角形後陣部に寸法線の密度に平面の構成が読み取れる (Fig.24)。

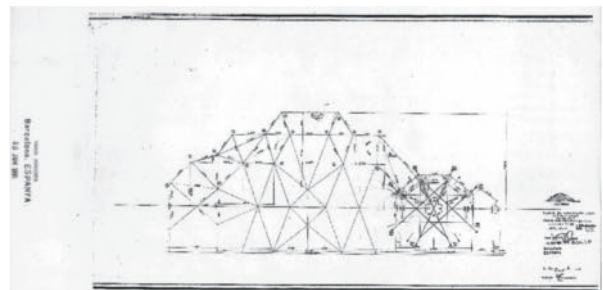


Fig.24) 実測 (遺構 1989) 1F 芯心柱割 1/2 平面, 1989.

5) 実測 (遺構 1989) 1F 芯心基準寸法平面図; No 05/23p 鉛筆, トレベ, (S=1/50) W450×L850 mm, Barcelona, Spain. 1990.*

・解説：1989年当時の1階平面図(完全)で、エントランス側の化粧積高さを変えて部分平面を表現している。八角形の後陣部は、モザラベのモチーフ天井ドームのリヴ「オージーヴ」が構成されている。その外壁意匠にはグラフィカルなデザイン表現を抜き出して実測が記録してある (Fig.25)。

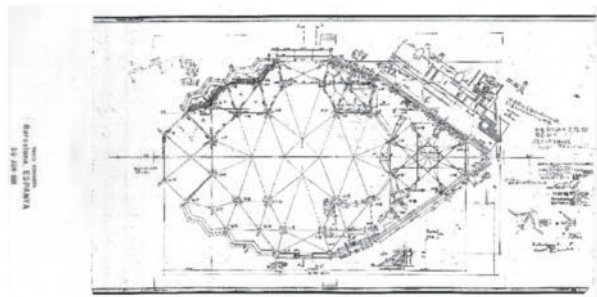


Fig. 25) 実測 (遺構 1989) 1F 芯心基準寸法平面図, 1990.

6) 実測 (遺構 1989) 尖頭後陣高床柱脚図; No 06/23p 鉛筆, トレベ, (S=1/50) W450×L850 mm, Barcelona, Spain. 1990.*

・解説：丘陵崖から突き出している尖頭部分の後陣を傾斜地に打たれた柱脚である。興味深いのは、その天井に仕上げで貼られているコンクリート薄板(コンクリートブロック4分割サイズ?)が丁寧に、ラテン十字型に張られていることがわかる (Fig.26)。

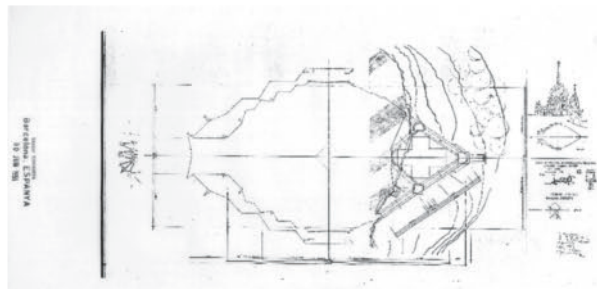


Fig. 26) 実測 (遺構 1989) 尖頭後陣高床柱脚図, 1990.

7) 実測 (遺構 1989) 1F 階段・側廊 (化粧積湾曲) アーチ平面; No 07/23p 鉛筆, トレベ, (S=1/50) W450×L850 mm, Barcelona, Spain. 1990.*

・解説：1階平面図に中二階・祭壇予定への両サイドからの階段とスキップフロアーになった1階八角形の後陣部。エントランスにジュジョールの断面図にみるように1スパン増やした形で付加させている。側廊(化粧積湾曲)アーチ(コンクリートブロック3分割)が緩い曲率で柱壁間を繋いでいる (Fig.27)。玄関が1スパン付加は、断面エスキスが立面エスキスより1スパン分規模が大きいことによる。

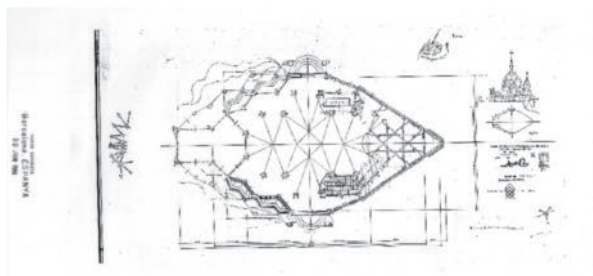


Fig. 27) 実測 (遺構 1989) 1F 階段・側廊アーチ平面, 1990.

8) 実測 (遺構 1989) 1F 平面図+内外壁展開図; No 08/23p 鉛筆, トレベ, (S=1/50) W450×L850 mm, Barcelona, Spain. 1990.

・解説：1階平面図に1階の内外壁のブロック積の各面毎の展開を記録している。ファサード部の石板下屋上部が正三角形で構成され、六角形で埋められた開口アーチにはゴシックの匂いも漂っている (Fig.28)。

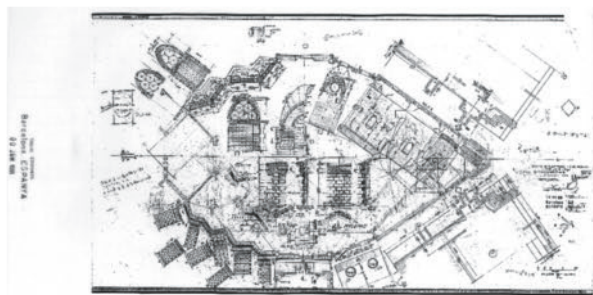


Fig. 28) 実測 (遺構 1989) 1F 平面+内外壁展開, 1990.

9) 実測 (遺構 1990) 1F クーボラ伏図+各单位アーチ展開+後陣 2F 平面図; No 09/23p 鉛筆+点描インキング, トレベ, (S=1/50) W450×L870 mm, Barcelona, Spain. 1991.*

・解説：ジュジョールの手がけた1階ドームのアーチ群(未完)の展開1/2を起こしたのと、クーボラ群の曲面のドーム感をインキング点描にて表現した。後陣の立ち上がり壁や柱型組積を書き起こしている (Fig.29)。

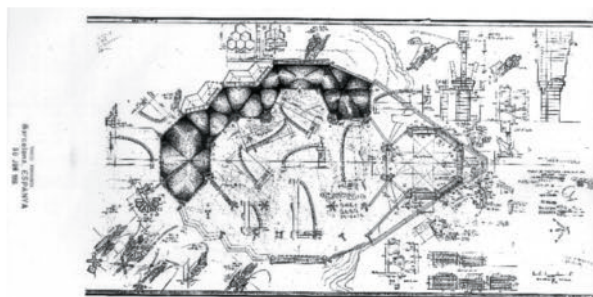


Fig. 29) 実測 (遺構 1989) 1F クーボラ伏図+各单位アーチ展開+後陣 2F 平面図, 1991.

10) 実測 (遺構 1990) 後陣 (尖頭高床) BF/1F/2F 各階天井伏図; No 10/23p 鉛筆, トレベ, (S=1/50) W450×

L850 mm, Barcelona, Spain. 1990.*

・解説：後陣部分の各階の天井伏図を高床部（ラテン十字形）・1階（8角星オージーヴ交叉リブ）・2階鐘塔（8角形星型トップライト）について各表情を比較している。因みに、2階天井は、再建での施工現状を記録表現している（Fig.30）。

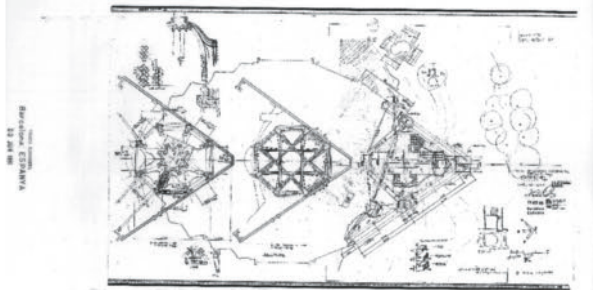


Fig.30) 実測（遺構 1990）後陣 BF/1F/2F 各階天井伏図, 1990.

11) 実測（遺構 1990）後陣 1F1/2 + 2F1/2（対比）天井伏図；No 11/23p 鉛筆，トレペ，（S=1/50）W450×L850 mm, Barcelona, Spain. 1990.*

・解説：1階平面図に1/2に対応した1階2階後陣部天伏と1階2階内陣部の柱脚の型とアーチのブロック割り付けを図中に表現している（Fig.31）。

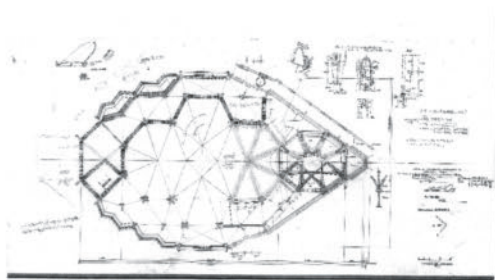


Fig.31) 実測（遺構 1990）後陣 1F1/2+2F1/2 天井伏図, 1990.

12) 実測（遺構 1990）横断面 1/2 図 X-X' 後陣側 A；No 12/23p 鉛筆，トレペ，（S=1/50）W450×L870 mm, Barcelona, Spain. 1990.*

・解説：1階平面の中央横断面図（中央袖廊）1/2（左右対称）より前方後陣の方向を記録している。左側丘陵敷地が崖で、右側が中央ゲート，祭事広場へと広がりを見せる（Fig.32）。

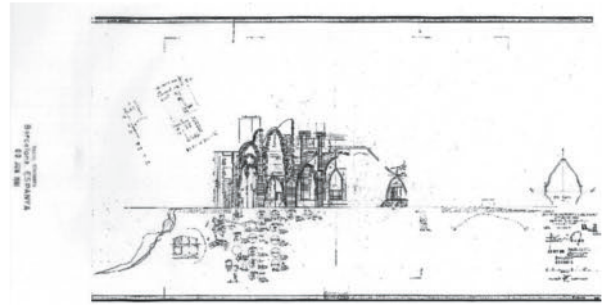


Fig.32) 実測（遺構 1990）横断面 1/2 図 X-X' 後陣側, 1990.

13) 実測（遺構 1990）横断面 1/2 図 X-X' 入口側 B；No 13/23p 鉛筆，トレペ，（S=1/50）W450×L870 mm, Barcelona, Spain. 1990.*

・解説：1階平面の中央横断面図（中央袖廊）1/2（左右対称）より後方エントランスの方向を記録している。右側に丘陵敷地の崖があり，左側に中央ゲート，祭事広場へと広がっている（Fig.33）。

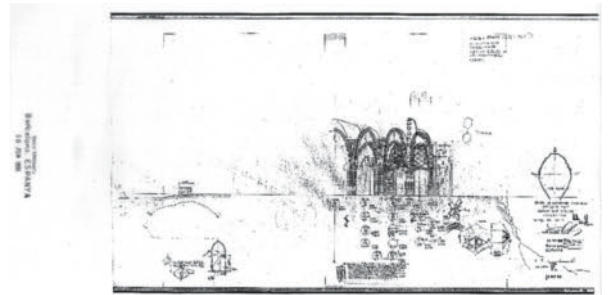


Fig.33) 実測（遺構 1990）横断面 1/2 図 X-X' 入口側, 1990.

14) 実測（遺構 1989）縦断面図 Y-Y' 身廊中央 A；No 14/23p 鉛筆，トレペ，（S=1/50）W450×L800 mm, Barcelona, Spain. 1989.*

・解説：1階平面の中央身廊縦断面，右側が後陣ピロティの崖方向，左側が丘陵地盤のエントランス側方向。中央に袖廊のアーチが通っているのがわかる（Fig.34）。

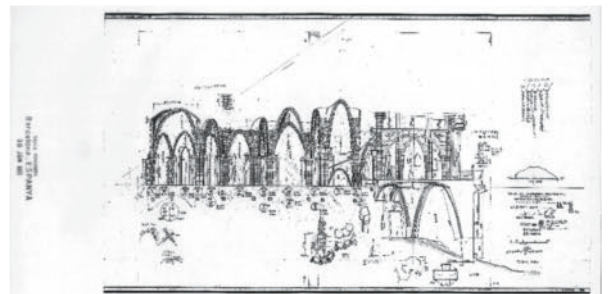


Fig.34) 実測（遺構 1989）縦断面図 Y-Y' 身廊中央, 1989.

15) 実測 (遺構 1989) 縦断面図 Y-Y' 側廊側 B : No 15/23p 鉛筆, トレベ, (S=1/50) W450×L870 mm, Barcelona, Spain. 1989.*

・解説：1階平面の側廊寄の縦断面, 右側が後陣ピロティの崖方向を, 左側がエントランス方向を点線表現する。中央に袖廊のアーチが通って明確に区画されているのがわかる (Fig.35)。

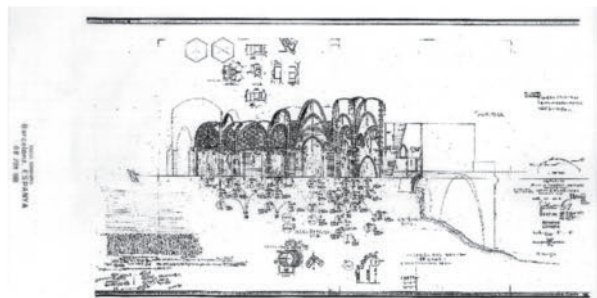


Fig.35) 実測 (遺構 1989) 縦断面図 Y-Y' 側廊側, 1989.

16) 実測 (遺構 1990) 後陣外壁展開図+(2F 再建アーチ展開図) : No 16/23p 鉛筆, トレベ, (S=1/50) W450×L830 mm, Barcelona, Spain. 1991.*

・解説：後陣部外壁の展開図で, ピロティ部の右側面の大アーチと敷地との関係に対応した小アーチと, 左側面2つの連続大アーチが教会堂の尖頭造形を印象付けている。2階に見えるアーチは再建の建設状態を示している (Fig.36)。

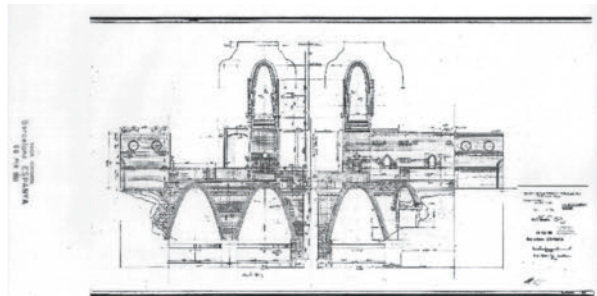


Fig.36) 実測 (遺構 1990) 後陣外壁展開図+(2F 再建アーチ展開), 1990.

17) 実測 (遺構 1990) 南側：ファサード未完・第1層立面図 : No 17/23p 鉛筆, トレベ, (S=1/50) W450×L870 mm, Barcelona, Spain. 1990.*

・解説：1989年当時の正面ファサード1階部の遺構状態を示し左側の一部は未記入状態。未完状態でのクーポラの天井ドームが露出していて一見, イスラム調の印象を受けるのはカタロニアの建築の根底に流れる歴史が物語っているのかも知れない。この正面には, 穏やかな印象を受ける (Fig.37)。

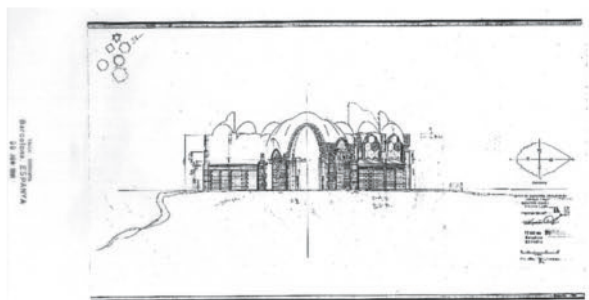


Fig.37) 実測 (遺構 1990) 南側未完第1層立面図, 1990.

18) 実測 (遺構 1990) 西側：サイド未完第1層立面図 : No 18/23p 鉛筆, トレベ, (S=1/50) W450×L870 mm, Barcelona, Spain. 1990.*

・解説：この未完の立面を見ると中央に天井ドーム群, エントランス側 (右側) にゴシック調のトレサリー開口部があり, 左側尖頭部後陣の崖から突き出たアーチのピロティといった複雑な構成が読み取れ, 当時, 興味を掻き立てられた想いが蘇る (Fig.38)。

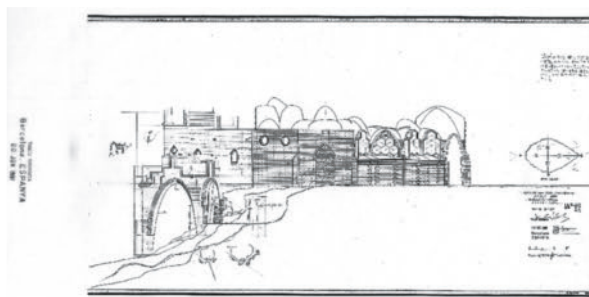


Fig.38) 実測 (遺構 1990) 西側未完第1層立面図, 1990.

19) 実測 (遺構 1990) 北側：後陣未完・第1層立面図 : No 19/23p 鉛筆, トレベ, (S=1/50) W450×L870 mm, Barcelona, Spain. 1990.*

・解説：尖頭後陣側からの立面だが, 正面とは対照的に崖から突き出たピロティの柱脚からは, ジュジョールの挑戦的意思さえ伺える。各立面に表情が如実に表されているのが解る (Fig.39)。

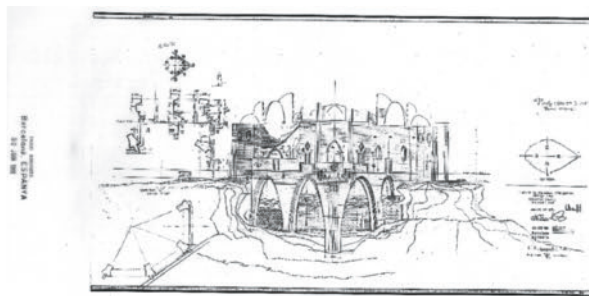


Fig.39) 実測 (遺構 1990) 北側後陣未完第1層立面図, 1990.

20) 実測 (遺構 1990) 東側：サイド未完・第1層立面図 : No 20/23p 鉛筆, トレベ, (S=1/50) W450×L870 mm,

Barcelona, Spain. 1990.*

・解説：均整の取れた東側立面であり、右ピロティ部の連続アーチがリズムよく崖敷地と馴染ませてくれている (Fig.40)。

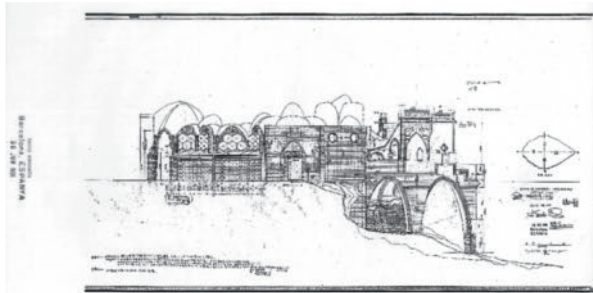


Fig.40) 実測 (遺構 1990) 東側未完第1層立面図, 1990.

21) 実測 (遺構 1990) コンクリート・ブロック Type-1 柱型図; No 21/23p 鉛筆, トレペ, (S=1/5) W450×L850 mm, Barcelona, Spain. 1990.*

・解説：身廊内を構成するのコンクリート・ブロック (Size : 300×100×150 mm) による柱型のバリエーションである。(Fig.41)

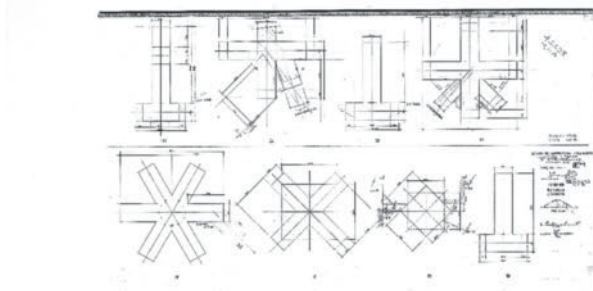


Fig.41) 実測 (遺構 1990) コンクリート・ブロック Type 1 柱型図, 1990.

22) 実測 (遺構 1990) コンクリートブロック Type-2 柱型図; No 22/23p 鉛筆, トレペ, (S=1/5) W450×L850 mm, Barcelona, Spain. 1990.*

・解説：主に後陣部分を構成する柱型をまとめている。特に、「オージーヴ」を支える柱型には、ジュジョールの苦心が読み取れる (Fig.42)。

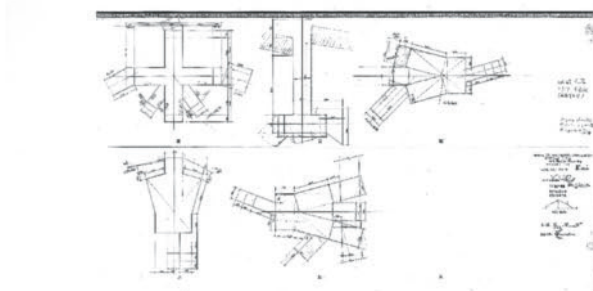


Fig.42) 実測 (遺構 1990) コンクリート・ブロック Type 2 柱型図, 1990.

23) 実測 (遺構 1989) 丘陵外構スケッチ; ゲート・堀・洞穴・陸橋 No 23/23p 鉛筆, トレペ, (S=1/50・1/30) W450×L950 mm, Barcelona, Spain. 1991.*

・解説：メインゲートのシェルの畝った塀と石積の門。祭事広場と教会堂を繋ぐ陸橋。なんととっても裏門を下ると祭事広場の下の崖側面に洞穴が掘られていて当時は、その活用までの製作が加えられてはいなかった (Fig.43)。

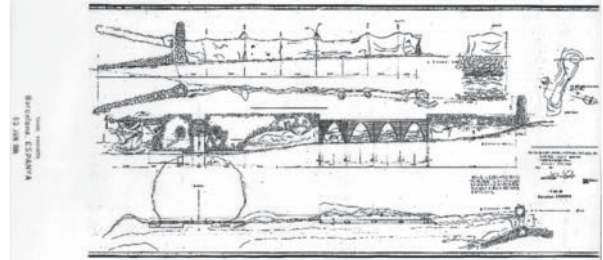


Fig.43) 実測 (遺構 1989) 丘陵外構スケッチ施設図, 1989.

* 以上 23Page

6. 実測図面からの考察・モンフェリーの構想性の意識；

そこで、実測図面から何が見て取れるかの考察を進めてみたい。その糸口からジュジョールの思考を探ってみる。以前の論文 (2015) では、手法は異なる A. ガウディの〈コロニア・グエル (1908-14)〉の平面より一まわり小さく規模こそ違うが相似性を帯びていることを指摘した。



Fig.44) コロニア・グエル地下聖堂教会; 1989.

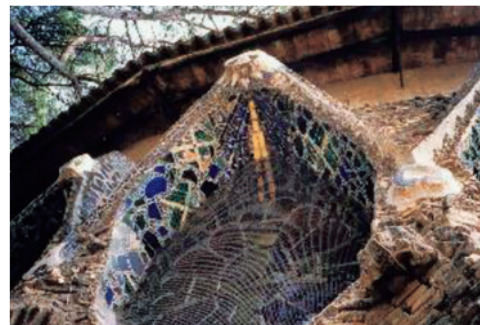


Fig.45) 粗い表情で覆われた開口部造形が象徴 1989.

そこで、更に考察を進めてみる。コロニア・グエル平面では丘陵の側面に洞穴状の半地下の配置に対して、モンフェリー教会堂では、丘陵から突き出すように崖から平原を一望する眺望を呈する真逆の立地環境でありながらも、松林が自生している点である。コロニア・グエルのエントランスとモンフェリー教会堂の後陣トリビューンの違い以外は極めて酷似している。ただ、何か立地自体に、コロニア・グエルを意識しているように見えてならない。

ただ一つ、モンフェリーの後陣が尖頭形をしている点の理由が見い出せないでいた。実測図の整理を通して改めて冷静に考えてみようとした。ジュジョールは、モンフェリーではまったく違う平面造形を印象付けておきながら、コロニア・グエル平面を意識したジュジョールらしい手法を用いて A. ガウディに挑んだのではないだろうかと考えている。

6-1. モンフェリー教会堂平面に潜むコロニア・グエル地下聖堂平面からの考察；

1) 平面プランの相似性にみる建築概念形成；

既に指摘しているようにコロニア・グエル (Fig.44) とモンフェリーとは全体が一周り小さく相似形のように外壁が幾何学的に分割構成されているモンフェリー教会堂平面に気が付く。

驚くことに、祭壇と同じ五身廊の鐘塔直下中央までの距離が二作品ともほぼ等距離にある点である。一見、ランダムな身廊を形成しているが、両方の図面からは、柱割りの貫いている共通の五身廊が見逃せないのである。その重要性からジュジョールは、この五身廊を踏襲せずにいられなかったに違いない。教会堂の骨格だからであり、コロニア・グエルとの相似性の痕跡を示すためにも外せなかったのであろう (Fig.46)。

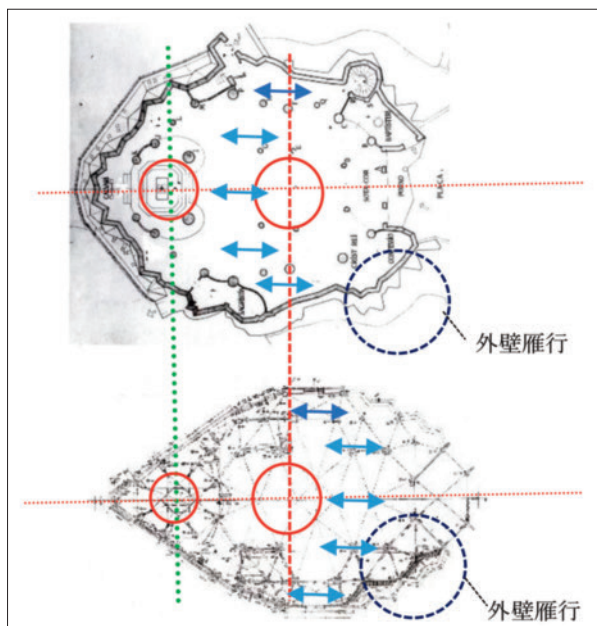


Fig.46) 祭壇～中央距離・五身廊・雁行壁 (図面 No.05)

2) コロニア・グエルの「巻き込み」型外壁の自由な造形；
更に、ジュジョールは幾何学的 (三角形) に納めようとする痕跡が全体の柱割り構成までに影響しているかのよう読み取ることができる (Fig.47)。

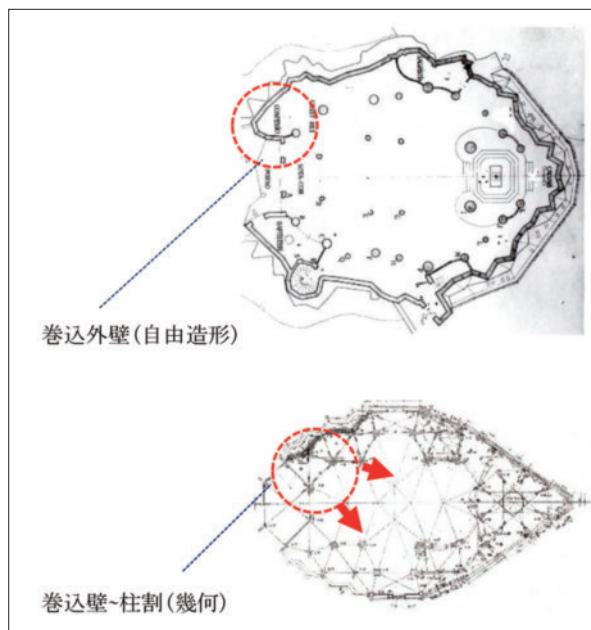


Fig.47) 外壁巻き込み (図面 No.05) の三角柱割展開構成

3) ゴシック要素の組積；

また、コロニア・グエル全体の外部仕上げが自然な岩肌を印象付けエントランスの外壁をゆっくりと自然に湾曲させ入り口に導く造形表現を A. ガウディがしているのに対し、ジュジョールはカタルーニャ・ゴシック様式 (二重壁) を用いたかのように整然とコンクリート・ブロック広面を組積し、鈍角に角度を付けて雁行させる試みで収めて入り口に導く造形表現をしている (Fig.46) など実測図面からわかってきた (Fig.48・49)。



Fig.48) 整然とカタルーニャ・ゴシック様式で雁行正面再建 2000.



Fig.49) 雁行トップのディテール：化粧組積詳細 1989.

4) 天井伏せにみる酷似性；

これは偶然なのかも知れないが、平面の性格は天井に表されてくると考えた。一見異なる平面でも天井を見返してみるとその相似性の本質が表れてくる。コロニア・グエルの天井伏図は身廊玄関側に馬蹄形のリブが、中央2つの中心から左側へ祭壇～後陣へと放射状に構成されている。一方、モンフェリーは、平面図での比較になるが、身廊の2つの大クーポラを中心に左右に2つの馬蹄形に柱構成が読み取れ、ジュジョールは、側廊側にも縦に馬蹄形を合わせた十字型に構成させていることが読み取れ興味深い (Fig.50)。

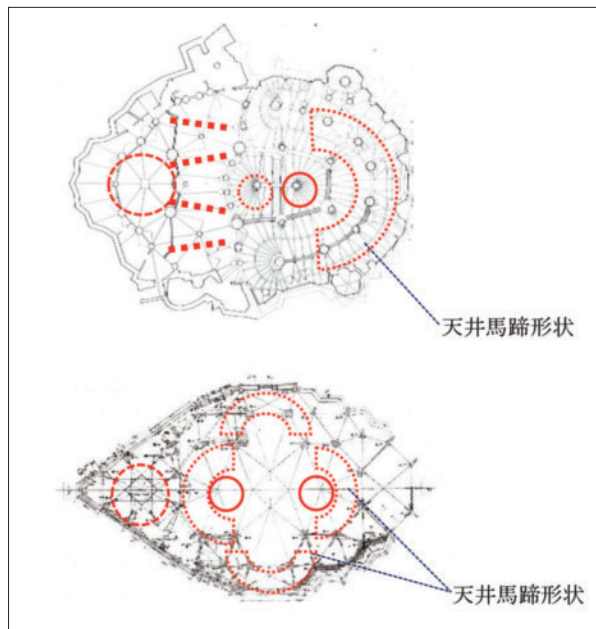


Fig.50) 天伏せ (図面 No.05) にみる後陣-馬蹄形の構成

6-2. モンフェリー教会堂の後陣造形の考察；

だがただ一つ、後陣のモンフェリー教会堂の尖頭先の細り造形と決定的なコロニア・グエル地下聖堂の膨らみを持ったジグザグ感との対比的なまでの違いの理由が見えていないのである。そこで、それぞれの立地環境に立

ち返って図面を見るとモンフェリーは、畑の真ただ中の丘陵端の崖から建築遺構が飛び出す状況で樹齢のいかない「松」が点在して密と疎に配置された松林の環境といえる (Fig.51)。それに対してコロニア・グエルは、樹齢のいった松林が茂る丘陵の中の斜面に潜むように未完の建築が貫入し、樹齢のいった鬱蒼とした生い茂る松に囲まれた環境といえる。



Fig.51) 松林の洞穴への小径・左に敷地の陸橋 1989.

当時、モンフェリーで印象深いのは、形がかわいらしく映ったカラカラになった「松ぼっくり」を1つ拾って、マウントケースに入れて帰宅している。正式には「松毬・ちちり」(雌花・松笠)であるが、思い返してみると両方に共通した「松の木」は成長の象徴といわれ、その種子の集合体としての球果「松毬」は外側を鱗片で構成し、幾何学的な配列(フィボナッチ数列)が螺旋状を呈する卵型楕円形の形状をとるタイプのものである。



Fig.52) 松毬と鱗片を外し分解した形状

こう考えてみた、コロニア・グエルの平面形をA. ガウディがもし、「松毬」の鱗片の凹凸の様相に岩肌をダブらせた平面形としたとすると、ジュジョールはモンフェリーの平面を同じ「松毬」をA. ガウディとは異なる表現で一見似つかわしくなく造形化しようと試みたのではないかと考えた。それは、共通項を内包しながら異なる形である平面造形の表現に他ならないと考えた。

そこで、そこに生まれる概念を「松毬」の鱗片(種子)を1枚ずつ外してみてもはどうだろうかと考えてみた。つまり、非常に硬い鱗片の殻を外してみると、中に細長い尖頭鋭い芯ともいべき核芯に開いた後ろの羽根の鱗片の「矢のような」造形が現れてくる (Fig.52)。それが、

モンフェリー後陣の尖頭を形作った一つの理由ではなかったのかとやっと疑問が解けた感にたどり着けた。

ジュジョールは、発想の原初を「松ぼっくり」にその内包する構造から中心の核としての新たな A. ガウディを超えるための概念を導き出す思考にたどり着いたのではないだろうか。

ガウディを尊敬しながらもジュジョールが様々な作品で見せた A. ガウディへの傾倒から離れた建築表現を模索した。ジュジョールと同様に A. ガウディに近い弟子の F. ベレンゲル M. (1866-1914) や J. ルビオー B. (1871-1952) らのようにガウディ作品に傾倒する道を辿らなかったことから、ジュジョールの決定的な意思がここに明確に表現されていると考えた。

コロニア・グエルをモチーフに潜ませながら A. ガウディからの脱却に迫った思考で凌駕する概念をこのモンフェリーの構想で見出し、その到達した構想の概念が物語っているのではないだろうか (Fig.53)。



Fig.53) 畑の中に浮かぶ松林の遺構丘陵 1990.

7. まとめ；

モンフェリーの実測から丁度 30 年になるが、さまざまな機会を得て発表してきた考察だがジュジョールを語る時、どの作品の考察より多様性を秘めたのがこの未完のモンフェリー教会堂なのではないかと考えている。先にも記したが未完で風化していた当時の遺構建築に地元カタルーニャでは関心があまり深く寄せられておらず、私にとって本当に機会に恵まれていたと思うのである。とりもなおさず、この建築自体にジュジョールの晩年の思考の本質が込められていることに他ならないからである。これらの実測図があったことが「コロニア・グエル地下聖堂」との比較考察が可能となったことを考えると、約 30 年もの今になって考察の広がる可能性を秘めていることがわかる。その意味でも、実測し、記録したこれらの図面の整理には存在価値と意義があるのではないだろうか。自身でもこのモンフェリ教会堂がまさかコロニア・グエル地下聖堂に構想をダブらせていたのではないかという考察には想像もしなかった。でも、考察を重ねるとジュジョールの A. ガウディに対する脱却と

凌駕する思いの丈が随所に垣間見てとれる。そして、それは、カタロニアの地方の建築家が近現代の建築的思考を駆使するといったスタイルをどのように会得していったのか？

その発想はもしかしたら、先達の建築家達からの教示よりもカタロニア・ロマネスク美術や伝統的絵画芸術の多様性や伝統工芸にみる民族の攻防などから生まれる総合芸術の奥深さがジュジョールを育てたのではないだろうか。

勿論、モデルニスモという時代の中での先達建築家の影響は否めないが、豊かな発想の洞察力には時代が就いて行っておらず、当時のジュジョールが 50 年程先の時代を走っているとさえ目を見張るものがあるのである。

ジュジョールは、決して破滅的で自堕落な私生活を送った建築家・芸術家ではなかったらしい。家庭も持って、現在もご子息が健在でもあります。

建築家としての職能に裏付けられた抑制からの発想とはどうしても結びつき難い不思議な建築家であり、出会えて調べていく程に興味益々尽きない対象である。

謝辞；

2020 年秋の今年、カタルーニャのサン・ジョアン・デスピーの街では、ジュジョール作品の「Casa Negre」を会場に大々的な「ジュジョール誕生 140 周年」を記念して 1 年間 (2019-20 年) の予定で様々な企画展が開催された。現地在住のガウディ始めカタロニア建築研究の丹下敏明氏 (建築家) から貴重な情報を戴いた。

また、アーカイブ・ジュジョールからも様々な情報を戴いた。実測当時、現地在住の田中裕也氏 (ガウディ研究) 夫妻や外尾悦郎氏 (サグラダ・ファミリア主任彫刻家)、J. バセゴダ N. (レアル・カテドラ・ガウディ教授・故) には様々に助言など戴いた (Fig.54)。田中氏は、北海道の同郷でこのバルセロナで自分に何ができるかの問答に鍛えられた気がする。そして、外尾氏は、A. ガウディのみならず L. ドメネク M. (1849-1923) についても造詣が深く、ドメネクの生地カネット・デ・マール



Fig.54) 外尾氏・バセゴダ教授・筆者；Catedra Gaudí, 1999.

では色々のご説明を戴き視野が広まっていった。バセゴダ先生にはジュジョールの資料やモンフェリーの再建図面など数多く見せて戴いた。

カタラン人のモンセおばさんには部屋を帰国までシェアらせて戴いた。その他、多くのスペイン人や研究者にご指導と「小雪」の鳴さんや城田光男氏(放送構成作家)、上杉邦夫氏(Arata Isozaki Associates 地元スタッフ)らの日本人の方々には日常においてもお世話になった。帰国してからは、前出の丹下敏明氏(Arata Isozaki Associates, ガウディやジュジョールの研究者)、入江正之早稲田大名誉教授、川成洋法政大学名誉教授、札幌在住の柴橋伴夫氏(美術評論家)、森枝雄司氏(ブックデザイナー『ガウディの影武者だった男』1992.)、J. Mercade ブルージェス氏(元UPC教授、ジュジョール研究)、Archivo Jujol; ジョルディ氏(ディレクター)及び、ジュジョール Jr. (hijo: ご子息)には感謝が絶えない。残念なのが、丹下さんにご紹介受けたマドリー在住の研究者 C. Flores 氏(ガウディとジュジョールの研究者)とはお会いする機会に恵まれなかったことが心残りである。渡西した当時、北海道江別からバルセロナの日本人学校の校長として赴任された白井潔・志津子ご夫妻にもお世話になった。

そして、いつもこの研究の整理に協力をいただいている高島のり女史と末岡紀子女史に感謝申し上げたい。

注釈；

註1.)「*」印は執筆者所蔵図面を示す。

出典(図・版)；

Fig.17) 空撮；Montferri 集落；Montferri 役場所蔵

Fig.18) 19) 20) 『GAUDÍ, JUJOL Y MODERNISMO』
C. FLORES LOPÉZ, AGUILAR, ESPAÑA,
1982.

参考文献；

- 1) 『J.Ma. ジュジョール G. (Architect; Spain/1879-1949) に関する建築調査研究 (VII)』木下泰男：日本建築学会北海道支部研究報告集 No.93, 111/2020.
- 2) 『J.Ma. ジュジョール G. (Architect; Spain/1879-1949) に関する建築調査研究 (VI)』木下泰男：日本建築学会北海道支部研究報告集 No.91, 111/2018.
- 3) 『J.Ma. ジュジョール G. (Architect; Spain/1879-1949) に関する建築調査研究 (V)』木下泰男：日本建築学会北海道支部研究報告集 No.89, 085/2016.

- 4) 『J.Ma. ジュジョール G. (Architect; Spain/1879-1949) に関する建築調査研究 (IV)』木下泰男：日本建築学会北海道支部研究報告集 No.88, 096/2015.
- 5) 『建築家：Josep Maria Jujol y Gibert』に関する調査研究(1)木下泰男：星槎道都大学研究紀要・創刊号, p95-106/2020.
- 6) 『建築家：Josep Maria Jujol y Gibert』に関する調査研究(10)木下泰男：星槎道都大学紀要・美術学部第45号, p95-106/2019.
- 7) 『建築家：Josep Maria Jujol y Gibert』に関する調査研究(9)木下泰男：星槎道都大学紀要・美術学部第44号, p117-126/2018.
- 8) 『建築家：Josep Maria Jujol y Gibert』に関する調査研究(8)木下泰男：道都大学紀要・美術学部第43号, p71-79/2017.
- 9) 『建築家：Josep Maria Jujol y Gibert』に関する調査研究(7)木下泰男：道都大学紀要・美術学部第42号, p67-75/2016.
- 10) 『建築家：Josep Maria Jujol y Gibert』に関する調査研究(6)木下泰男：道都大学紀要・美術学部第41号, p59-65/2015.
- 11) 『建築家：Josep Maria Jujol y Gibert』に関する調査研究(5)木下泰男：道都大学紀要・美術学部第40号, p97-105/2014.
- 12) 『建築家：Josep Maria Jujol y Gibert』に関する調査研究(4)木下泰男：道都大学紀要・美術学部第39号, p127-137/2013.
- 13) 『建築家：Josep Maria Jujol y Gibert』に関する調査研究(3)木下泰男：道都大学紀要・美術学部第38号, p93-104/2012.
- 14) 『建築家：Josep Maria Jujol y Gibert』に関する調査研究(2)木下泰男：道都大学紀要・美術学部第37号, p107-117/2011.
- 15) 『建築家：Josep Maria Jujol y Gibert』に関する調査研究(1)木下泰男：道都大学紀要・美術学部第36号, p67-75/2010.

添付；

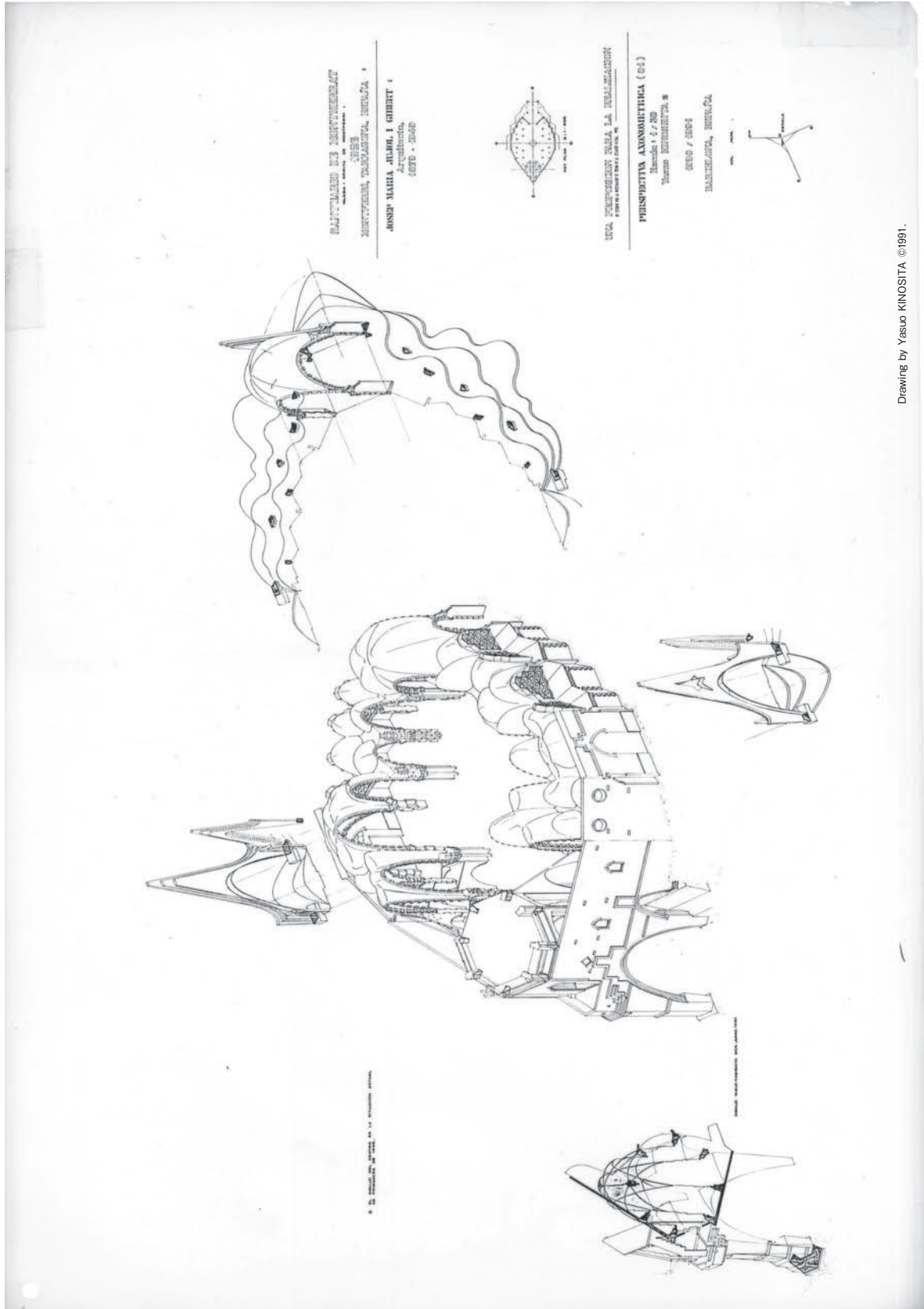
【参照】 Fig.55) 拡大実測(遺構 1991) 現況立体；Oblique, Military projection; No 01/23p インキング, ダブルトレーシング, (S=1/50) W950×L2,050 mm (オリジナル版), Barcelona, Spain. 1991.* 筆者所蔵：YASUO KINOSITA. ©1991. p140.

【参考】別表-1. 『Montferri 教会堂実遺構実測図面(野帳：1989-91) 整理一覧』/2021.

ABSTRACT ;

A Research of an Architecture Survey about Architect; Josep Maria Jujol y Gibert/1879-1949, Catalonia,Spain (12)

“Consideration on common ground between the list of measured drawings (possession) found in the measured drawings of “Relic of Iglesia de Montferri” and “the undercroft of Iglesia de La Colonia Güell”: The architectural trend of Catalonia, Spain.



Iglesia de Montferri: J. Ma. Jujol y Gibert. Montferri, 1926-30.

【参照】 Fig.55) 拡大実測（遺構 1991）現況立体；Oblique, Military projection; No 01/23p
インキング，ダブルトレーシングペーパー，（S=1/50）W950×L2,050 mm（縮小版），Barcelona, Spain. 1991.*
筆者所蔵：YASUO KINOSITA©1991.

添付別表-1. 実測図面 (野帳; 1989-91) 整理一覧: Montferri 教会堂 (未完); Jujol, 1926-30, Tarragona, Cataluña, Spain

(2021年)

No.	資料・実測	実測図面: Dibujos	Scale:	Size (mm × mm)	用紙・仕上: インク/ ペンシル	制作地/年	解説/所見・考察:	掲載 No- 備考
S-1	参照資料	地図: Catalonia, Spain/ AltCamp/Montferri	3-Type	W: 450 × L: 850	薄口トレベ/ コピー	Spain/Catalonia/ AltCamp/1990	* 当時市街で購入した地図を引用。	Fig.16)
S-2	参照資料	地図: Montferri 空撮ゼロ クス(1989年現況)	1/1,000	W: 450 × L: 850	薄口トレベ/ 写真コピー	Montferri/1989	* Ajuntament (村役場) 所蔵	Fig.17)
S-3	参照資料	Iglesia de Montferri: 立 面エスキス: Jujol	NoScale	A4(W:210×L:297)?	イエロートレベ/ ペンシリング	Montferri/1928	* 書籍資料より複写	Fig.18)
S-4	参照資料	Iglesia de Montferri: 柱 割平面図(柱間係): Jujol	NoScale	A4(W:210×L:297)?	(不明)	Montferri/1928	* 書籍資料より複写	Fig.19)
S-5	参照資料	Iglesia de Montferri: 断 面エスキス: Jujol	NoScale	A4(W:210×L:297)?	(不明)	Montferri/ 1928以降?	* 書籍資料より複写	Fig.20)
1	所蔵実測図	立体図: Oblique, Military projection (遺構 1991)	1/50	W: 950 × L: 1800	W・トレベ/ インクインク	Barcelona: Montferri/1991	* 立体表現にて 1989年当時の状況を示した(横長 W950 × L2,050 mm)。	Fig.21)
2	所蔵実測図	マスタープラン(集落広 域/1989年現況)	1/1,000	W: 930 × L: 2,080	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	* マスタープランは、村役所に借り縮尺に合わせ線画仕上。	Fig.22)
3	所蔵実測図	サイトプラン(現況配置 /1990年現況)	1/200	W: 450 × L: 850	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	* 丘陵を散策実測し、立ち木や教会堂遺構を基準に描く。	Fig.23)
4	所蔵実測図	1F 芯心柱割寸法 1/2 平 面図(遺構 1989)	1/50	W: 450 × L: 850	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1989	平面の柱割りを実測し、1/2平面に図面化し、内陣と8角 形後陣に寸法線の密度わかる。	Fig.24)
5	所蔵実測図	1F 芯心基準寸法平面図 (遺構 1989)	1/50	W: 450 × L: 850	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	1989年当時の1階平面図(完全)で、エントランス側の化粧 積高さを変えて断面を表現している。	Fig.25)
6	所蔵実測図	尖頭後陣(高床)柱脚平面 図(遺構 1989)	1/50	W: 450 × L: 850	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	丘陵崖から突き出している尖頭部分の後陣を傾斜地に打た れた柱脚である。	Fig.26)
7	所蔵実測図	1F 階段・側廊(化粧湾曲) アーチ平面図(遺構 1990)	1/50	W: 450 × L: 850	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	1階平面図に中二階・祭壇予定への両サイドからの階段とス キップフロアーになった1階八角形の後陣部。	Fig.27)
8	所蔵実測図	1F 平面図+内外壁展開 図(遺構 1989)	1/50	W: 450 × L: 850	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	1階平面図に1階の内外壁のブロック積の各面毎の展開を 記録している。	Fig.28)
9	所蔵実測図	1F クーボラ伏図+各単 位アーチ展開+後陣2F 平面図(遺構 1990)	1/50	W: 450 × L: 870	薄口トレベ/ ペンシル+点描インク	Barcelona: Montferri/1991	ジュジョールの手がけた1階ドームのアーチ群(未完)の展 開1/2を起こしたのとクーボラ群の曲面のドーム感をイン キング点描にて表現した。	Fig.29)
10	所蔵実測図	後陣(尖頭高床部) BF/1F/2F 各天井伏図 (遺構 1990)	1/50	W: 450 × L: 850	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	後陣部分の各階の天井伏図を高床部(ラテン十字形・1階 (8角星オーゾーフ交わり)・2階(8角形星型トップライ ト)を比較している。	Fig.30)
11	所蔵実測図	後陣 1F1/2+2F1/2 (対 比)天井伏図(遺構 1990)	1/50	W: 450 × L: 850	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	1階平面図に1/2に対応した1階2階後陣部天伏と1階2 階内陣部の柱脚の型とアーチのブロック割り付けを表現	Fig.31)
12	所蔵実測図	横断面 1/2 図 X-X'後陣 側 A(遺構 1990)	1/50	W: 450 × L: 870	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	1階平面の中央横断面図(中央袖廊)1/2(左右対称)より前 方後陣の方向を記録している。	Fig.32)
13	所蔵実測図	横断面 1/2 図 X-X'入口 側 B(遺構 1990)	1/50	W: 450 × L: 870	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	1階平面の中央横断面図(中央袖廊)1/2(左右対称)より後 方エントランスの方向を記録している。	Fig.33)
14	所蔵実測図	縦断面図 Y-Y'身廊中央 A(遺構 1989)	1/50	W: 450 × L: 800	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1989	1階平面の中央身廊縦断面、右側が後陣ピロティの崖方向、 左側が丘陵地盤のエントランス側方向。中央に袖廊のアーチ	Fig.34)
15	所蔵実測図	縦断面図 Y-Y'側廊側 B (遺構 1989)	1/50	W: 450 × L: 870	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1989	1階平面の側廊寄の縦断面、右側が後陣ピロティの崖方向 を、左側がエントランス方向を点線表現する。	Fig.35)
16	所蔵実測図	後陣外壁展開図+(2F 再 建アーチ展開図)(遺構 1990)	1/50	W: 450 × L: 830	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1991	後陣外壁の展開図で、ピロティ部の右側面の大アーチと敷 地との小アーチと、左側面2つの連続大アーチが教会堂の尖 頭造形を印象付けている。	Fig.36)
17	所蔵実測図	南側: ファサード未完・ 第1層立面図(遺構 1990)	1/50	W: 450 × L: 870	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	1989年当時の正面ファサード1階部の遺構状態を示し左側 の一部は未記入状態。未完状態でのクーボラの天井ドーム が露出	Fig.37)
18	所蔵実測図	西側: サイド未完・第1 層立面図(遺構 1990)	1/50	W: 450 × L: 870	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	中央に天井ドーム群、エントランス側(右側)にゴシック調の トレサリー開口部があり、左側尖頭部後陣の崖から突き出た アーチのピロティの複雑な構成	Fig.38)
19	所蔵実測図	北側: 後陣未完・第1層 立面図(遺構 1990)	1/50	W: 450 × L: 870	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	尖頭後陣側からの立面だが、正面とは対照的に崖から突き出た ピロティの柱脚からは、ジュジョールの挑戦的意気さえ伺える。	Fig.39)
20	所蔵実測図	東側: サイド未完・1層 立面図(遺構 1990)	1/50	W: 450 × L: 870	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	均整の取れた東側立面であり、右ピロティ部の連続アーチが リズムよく崖敷地と馴染ませてくれている	Fig.40)
21	所蔵実測図	コンクリート・ブロック Type-1柱型図(遺構 1990)	1/5	W: 450 × L: 850	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	身廊内を構成するコンクリート・ブロック(Size: 300 × 100 × 150 mm)による柱型のバリエーションである。	Fig.41)
22	所蔵実測図	コンクリート・ブロック Type-2柱型図(遺構 1990)	1/5	W: 450 × L: 850	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1990	後陣部分を構成する柱型をまとめている。特に、「オーゾ ーフ」を支える柱型には、ジュジョールの苦心が読み取れる	Fig.42)
23	所蔵実測図	丘陵外構スケッチ: ゲー ト・堀・洞穴・陸橋(遺構 1991)	1/50 1/30	W: 450 × L: 950	薄口トレベ/ ペンシリング	Barcelona: Montferri/1991	メインゲートのシェルの畝った堀と石積の門。祭事広場と 教会堂を繋ぐ陸橋。帰国も近くなり、記録すべき外構に着取 り図面化する。	Fig.43)

【註】 1989年当時、バルセロナの新市街から高速を使ったタラゴナ内陸への都市間バスで数軒しかないヴィラルビダ集落で下車し、徒歩でモンフェ
リーまでの道のりを通った約1年半余りの歳月は不安と帰国時間中で、再建開始直前の機会に恵まれた。

(* 星槎道都大学美術学部紀要 2021年(12)・添付別表)

A Research of an Architecture Survey about Architect;

Josep Maria Jujol y Gibert/1879–1949, Catalonia, Spain (12)

— Consideration on common ground between the list of measured drawings (possession) found in the measured drawings of “Relic of Iglesia de Montferri” and “the undercroft of Iglesia de La Colonia Güell”: The architectural trend of Catalonia, Spain —

KINOSITA Yasuo

Abstract

The Relic of Jujol's unfinished church lies in a small village of Montferri located in the Tarragona plain, inland from the historic city of Tarragona located along the Mediterranean, where the ruins of the Roman era remain. I have worked on organizing the actually measured survey drawings (1989~1991) of the unfinished “Iglesia de Montferri” which led to Jujol's “Architecture of Life.” I believe that the significance of organizing these drawings is that the record of Jujol's traces of the original state only remains in the measured survey drawings, since the relic been newly reconstructed in those days modified by the state government construction team. I am fascinated by the architectural expressions that Jujol derived as if he was struggling to shake himself free from A.Gaudí. The expression method and the thinking use the fact as a clue that distance from the central altar to the center of the nave were the same even though “Iglesia de Montferri” and “Iglesia de La Colonia Güell (crypt)” differed in scales, which was derived through organizing the actual measurement drawings, and thus my consideration about the expressions that are different but have something in common has been experimented from the perspective of the actually measured survey drawings of “Iglesia de Montferri.”